

◆旧大乘院庭園の調査—第285次・第287次

1 はじめに

本調査は、名勝旧大乘院庭園保護管理委員会と（財）日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園の保存修理事業」（平成6年度～）にともなう事前調査である。発掘調査は既に平成7年度に第260次・第268次、平成8年度に第275次の各調査がおこなわれている。

本年度の調査は、庭園敷地の北東部を中心におこなった。調査区は、園池北東の陸部（A地区、約300㎡）、園池東岸中央北部（B地区、約100㎡）、園池東岸北端（C地区、約20㎡）、北中島（D地区、約60㎡）、北岸中央（E地区、約50㎡）の5ヶ所を設定し、A・B地区を第285次、C・D・E地区を第287次とした。

2 各調査区の様相と検出遺構

園池東岸（B・C地区）

東岸陸部は、森蘊が『中世庭園文化史』（1959）で東御所跡と推定しており、中世・近世の大乗院庭園の骨格

をもっとも良好に残している。基本的な変遷は南岸と同様で、当初は東に緩やかにのぼる洲浜石敷の斜面を形成していたものに、中世以降、洲浜の上に堆状に盛土をして護岸の汀線を形成している。陸部には近世の盛土層が60cm程度あり、第275次および本調査ではこの面を保存するために、それ以前の遺構を検出するにはいたらなかった。この面上に近代以降の造作がそのままなされている。漆喰叩き状の带状遺構SX7191・円形遺構SX7192・ドーナツ形状遺構SX7193、金属管をともなう石組遺構SX7194を検出した。

園池北岸および北方陸部（A・E地区）

A地区の調査では、園池東岸陸部と同様、表土直下には漆喰叩き状の带状遺構SX7170・SX7171・SX7172・SX7173や円盤形状の遺構SX7175・SX7176・SX7177を検出した。円形遺構SX7175・SX7176の中心部に金属製の筒状遺物が据えられていることなどから、带状遺構・円形遺構を併せて、昭和6年頃に造られたミニゴルフ（ベビーゴルフ）のコース跡であることがあきらかになった。昭和初期に流行したミニゴルフに関する文献によると、SX7170・SX7171上にある煉瓦と石とモルタルで組まれた構造物SX7184・

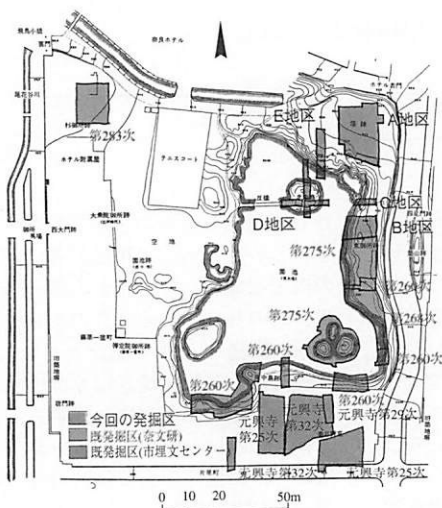


図84 第285・287次調査 発掘区位置図 1:3000



図85 A地区 SX7170, SX7175, SX7184など (南からみる)



図86 E地区 SX7195土器出土状況（南からみる）

SX7185は、ハザードと呼ばれるコース途中の障害物であることがわかる。コース脇にある鉄管をともなう石組の遺構SX7178・SX7179・SX7180・SX7181は、SX7178を断ち割った結果、排水をするための自然浸透式暗渠枠であることがわかった。さらに、このミニゴルフコースの遺構が検出されなかった部分で、南北6m×東西8mのトレンチを設定して掘り下げ、併せて、A地区南半東壁部分も掘り下げて断面観察をおこなった。その結果、東岸の北部から現在の奈良ホテルの門付近まですりつける形で近代に2m以上盛土していることが観察された。これらの遺構面は平坦ではなく、2基の土坑SX7187・SX7188を検出したのみである。これらの土坑には近世の瓦片などが大量に投棄されており、中心部には二葉松類の根株が検出された。断面観察では、この面の下に中近世の遺物を含む造成土がさらに1m以上堆積しているのも、中世の塔の遺構が残っているとしても、さらに下にあるものと考えられる。

E地区の断面観察では、園池推定水位90.0mによる汀線の位置から、北岸は江戸時代まで現況より10m以上北側に存在したことが観察された。この部分には4m近い盛土を施している。地山直上の層には黒色粘土を主体とした腐植土が堆積し、現在の汀線から12m北側の位置で急勾配をもって立ち上がる汀線部を確認した。黒色粘土層はこの付近でなくなる。汀線部と考えられる付近には径約40cmの石を地山上に据えてあり、護岸を形成していた可能性がある。近世以前の汀線と考えられる付近の地山は、南岸・東岸と同様、礫を主体とするものである。

明治42年（1907）に奈良ホテル本館を建てた際、園池北方に控える鬼蘭山は頂部を12m切り下げ、約10,000㎡のホテル用地が造成されている。本調査は、かつて塔が建っていたと森蘊が推定していた園池東北部の台地状の部分が、実は近世以前の原景観からの改変を著しく受けていることを確認したことになる。

軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	点数
平安時代	2	中世	3
小型菊丸	7	近世	13
巴瓦	5	近現代	1
近世	1	型式不明	3
近現代	1		
型式不明	4		
軒丸瓦計	20	軒平瓦計	20
丸瓦		平瓦	
重量	51.0kg	重量	307.8kg
点数	524	点数	3,117
道具瓦・その他			
軒棧瓦1・面戸瓦1・炭斗瓦1			

表18 第285・287次調査 出土瓦埴類集計表

北中島（D地区）

島自体には大きく4時期の変遷がみられ、基本的に時代が下るにつれて、高く盛り上げ、南側に太らせている。断面観察によると、もともと北中島の基礎となる地形が北岸から続いていたのを、地山まで掘り込んで島としたらしいが、この造成がどの時期におこなわれたのかは不明である。また、トレンチD2の西端では、柱穴2基を検出したが、園池西岸にわたる反橋に関わるものか確認はない。島の形状変化を考えると、古い橋脚跡は現在より北に位置した可能性もあろう。トレンチD1では、地山直上の土層で、柱穴と土坑数基を検出した。とくに土坑SX7195には奈良時代以前の土器類が納められていた。これらは大乘院庭園の園池が古い自然池を基本としたものであるとすると、平城遷都以前における池の利用について考える手がかりとなるものである。

3 出土遺物

近代の造成土から、古代～近世の瓦、徳利などの陶器が出土した。B地区・C地区の洲浜部分では遺物は皆無であったが、B地区北端の東西トレンチ東端では多量の土器片のほか、現地表面より30cm下の黄褐色土層からほぼ完形の天目茶椀1点出土した。D地区では、土坑SX7195から7世紀頃の鍔釜（河内産）、土師器の長胴甕、須恵器の甕など、奈良時代以前の土器片が多数出土している。瓦類の出土数は表18のとおり。

4 まとめ

今回の調査で、従来、原形をよく保っていると考えられてきた園池北縁の地形は、主に盛土造成によって大きく変貌していることがあきらかになった。今後、園池と岸の形態を中心に、古代・中世・近世・近代、各時代における庭園地形の骨格を検討し、景観の変遷をつぶさに復原構成することが肝要である。（平澤 毅／白杵 勲）

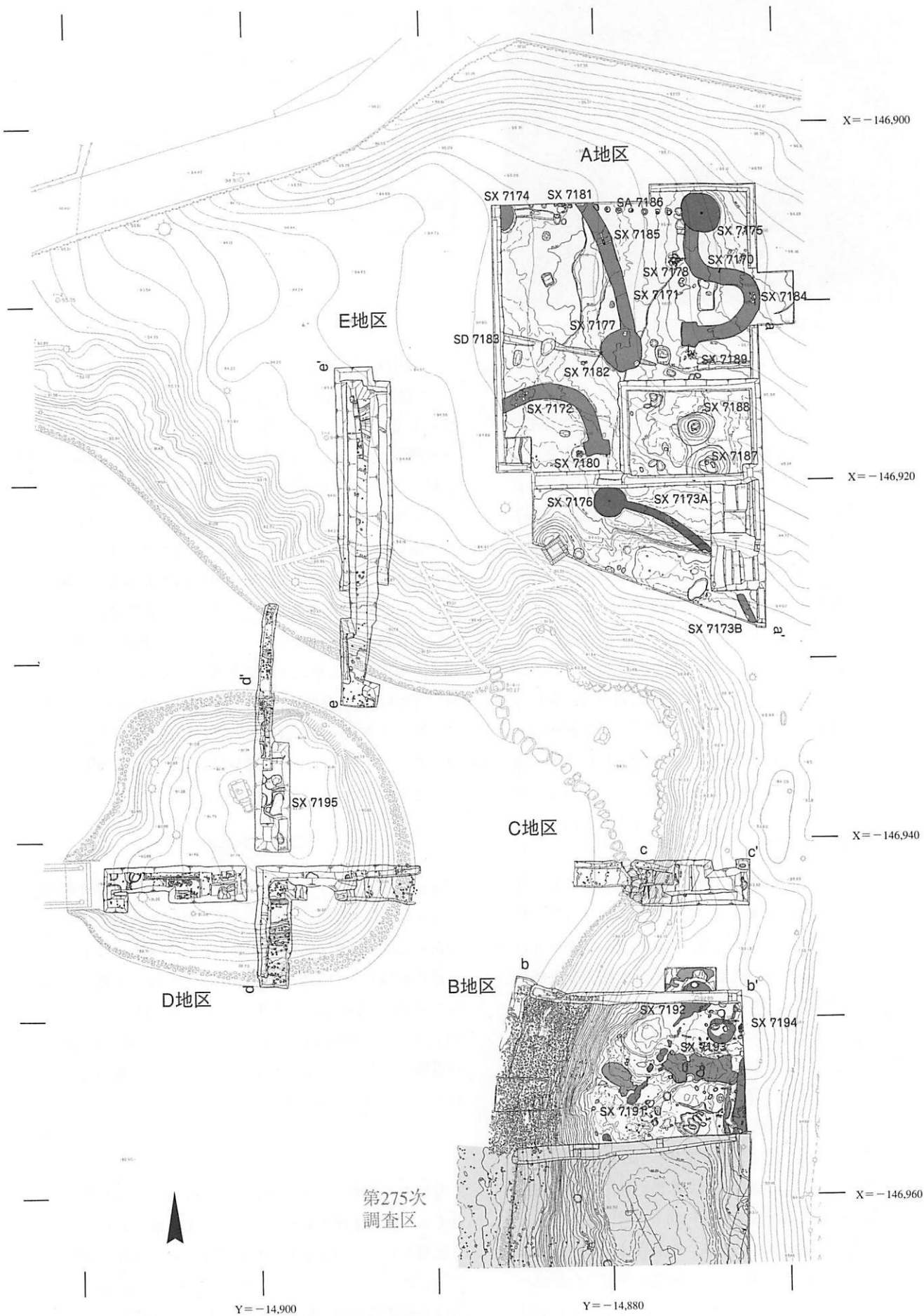


图87 第285・287次調査 遺構平面図 1:300

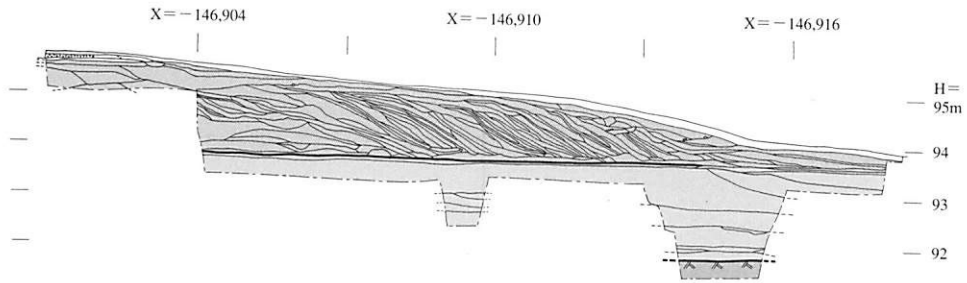


図88 A地区 a-a' 断面図 (西から) 1:150

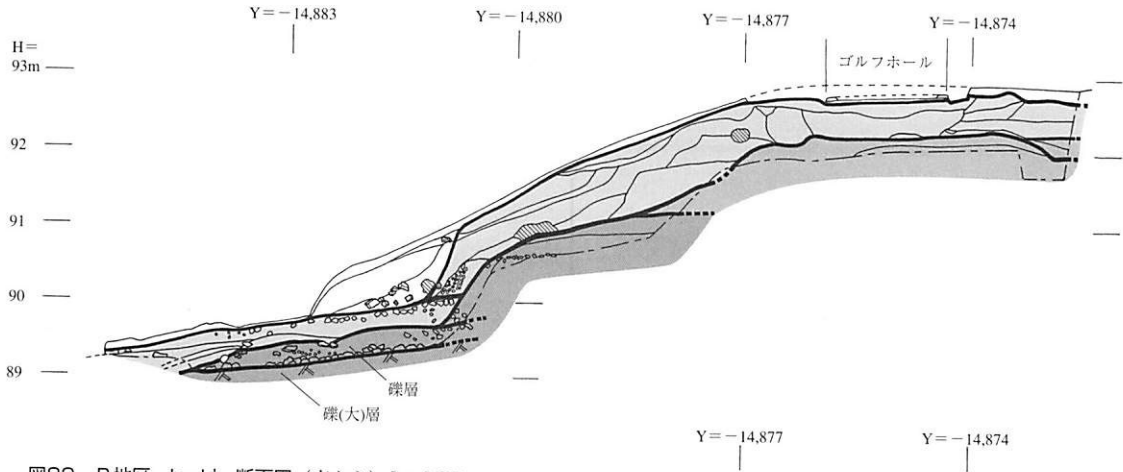


図89 B地区 b-b' 断面図 (南から) 1:100

凡例

- 表土・現代の造成土
- 近代の造成土
- 第1層(～近世)
- 第2層(～中世)
- 第3層(～平安時代)
- 第4層(～奈良時代以前)
- 地山

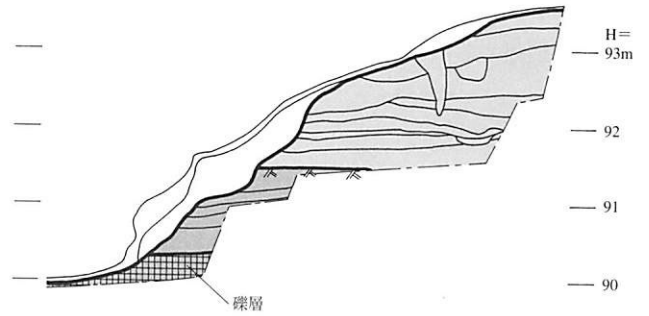


図90 C地区 c-c' 断面図 (南から) 1:100

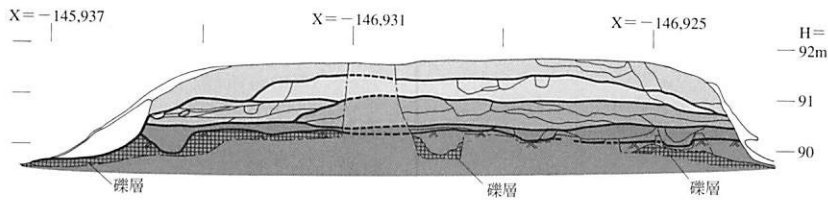


図91 D地区 d-d' 断面図 (東から) 1:150

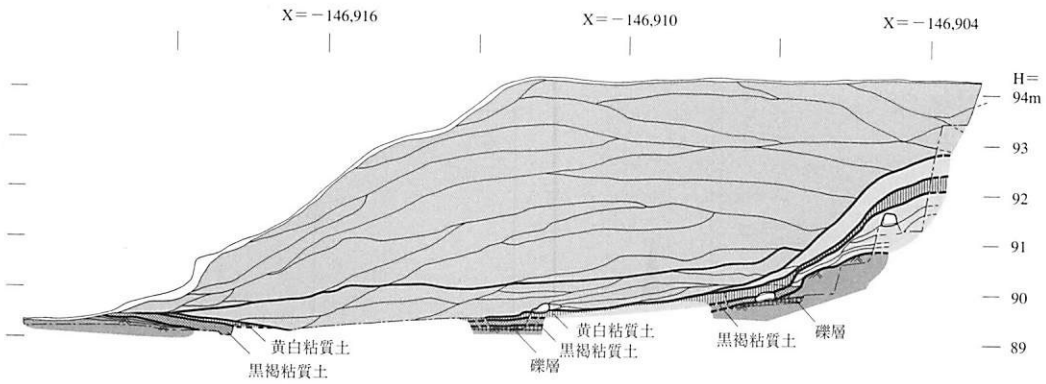


図92 E地区 e-e' 断面図 (東から) 1:150